

2021年1月3日 新年礼拝: 宣教要旨(年頭所感)

申命記 32:10~14 「鷲のごとく」

高井 卿 介

今朝は年頭所感として申命記32:10~14から「鷲のごとく」と題して語りたい。これはイスラエルの指導者モーセが民をエジプトから脱出させ、約束の地カナンの方岸に着いて、死を前にして語った「歌」である。

I. 元気なモーセ

モーセは「死んだとき120歳であったが、目はかすまず、活力もうせていなかった」(申命記34:7)。だから、彼は43節もある歌をイスラエルの全会衆に「余すところなく語り聞かせた」(31:30)のである。

この歌からモーセの豊富な神理解が分かる(4~8節)。①「主は岩」 ②「真実の神」 ③「贖い主」 ④「造り主なる父」 ⑤「いと高き神」

II. 見つけ出した親鷲の愛

死の間際の歌を「白鳥の歌」と言うが、モーセは「鷲の歌」を歌っている。先ず、親鷲の雛鷲への愛である。

「主は荒れ野で彼(雛)を見だし、獣のほえる不毛の地でこれを見つけ」(10節)とある。見つけたのは、親鷲であって、雛ではないと言う事である。もし見つけられなかったら、雛は飢え死し、獣の餌食になったかも知れない。

これに関連して思い出すのが、迷い出た一匹の羊を探し廻って見つけ出し、肩に担いで帰った羊飼いについてのイエスの譬である(ルカ15:4~6)。

更に、見つけ出した雛鷲を親鷲が運ぶ方法にも、その愛情を見る。決して「鷲づかみ」や、嘴に挟むのでなく、貴重品を運ぶように「翼に載せて運ぶ」(11節)のである。

また、「ご自分のひとみのように守られた」(10節)とある神の愛を見る。神は私たちの瞳を守るために、睫毛によって異物や虫などが入りそうになったら、間髪を入れずに蓋をして守ってくださる。

更に、瞳を乾燥から守るため、また万が一塵などが入ったら涙によって洗い流して下さるのである。

III. 親鷲の訓練の愛

雛がいつまでも暖かい巣の中にいたのでは、大空を飛ぶ鷲とはなれない。そこで「親鷲が巣を揺り動かし」(11節)で、巣の中から追い出すのである。雛は翼を動かしてもどんどん落下する。地面に叩きつけられんとしたその瞬間、親鷲はサッと羽を広げて受け止める。そして再び上昇して雛を放り投げる。これを繰り返して、雛は飛ぶことを覚えるのである。

それを身につけるのは、羽を動かすだけでなく、見えざる空気の揚力が羽に働くことを知った時である。しかし、翼を持っていても空を飛べない鳥もいる。鶏やダチョウである。

私たちはその様な鳥でなく、今年、神への信仰と服従という二つの翼を広げ、神の恵みの揚力を受けて、大空高く飛翔する「鷲のように翼を張って上る」(イザヤ40:31)者でありたい。「新年、あけましておめでとうございます」